サピエンスと馬

── 競馬の誕生 ──

高　橋　一　友

1．はじめに

競馬（「horse racing」）は馬を用いたイベントの１つである。語源から辿ると２頭以上の馬がお互いの能力を競うことすべてが競馬と感じられるが、それは誤謬（言葉足らず）であって今日的な意味での「競馬」はその行為自体を私たちホモ・サピエンス（現存する人類）が認知の共有に基づいて催事ないしは興行へと育てることによって初めて成立したのである（「闘鶏」も同じような人の眼差しを介した言葉である）。まずはその前提事項から確認しなければならない。日本競馬と言えば、日本人が創作した競馬であって、それは他のどのような国の競馬とも異なるのはごく自然なことである。ましてや「日本近代競馬」ともなれば「近代」という思想と伝統的な日本競馬が結合して出来たものであるから、その内容は必然的に特殊なものにならざるを得ない。

これまで我が国において人と馬の関係は常に諸外国との相互作用のもとで発展して来た。古代日本の競馬は東アジア（特に中国、朝鮮半島）を中心とする近隣諸国の影響を受けて主に祭事の一種として定着した[1)]。一方、近代（洋式）競馬は欧米（特に英国）を中心とする列強先進国の娯楽文化として幕末期に伝来した[2)]。後者は受容するに至り、大きな課題を抱えていた。

すなわち、①地形に依存する人と馬の交流史、②社会の近代化、③社会風土によって形づけられる動物認識あるいは競馬観、④身分階級と宗教、娯楽（に対する考え方）、⑤スポーツ・ギャンブル・ゲームなどの歴史経験やその価値判断、⑥自由・民主主義的なイデオロギー、⑦（議会制度にも関連付けられる）投票行動やレースを管轄する近代的な組織などの問題群である。その点で産業革命を起こし、資本主義の発展のもと、帝国主義を展開した英国は他国にはない文明上の優位性があった。また、余暇と連動した近代スポーツの誕生と発展、娯楽目的に作られた各倶楽部やルールの普遍化はまさに英国社会特有の現象であった。歴史的に近代スポーツ（近代競馬を含む）の展開においては英国と他国の間で大きな格差を経験した。この地で最初にサラブレッド種[3)]が誕生したのも決して偶然ではない。

近年、人類の発展史に関する新しい見方も登場して来た。ハラリ（2016ab）は、ヒト科のサピエンスによる認知革命[4)]や近代以降の資本主義の経済展開と深く結びついた科学の発展と貨幣の発明、流通に人類の革新性を見出した。また、ブレグマン（2021）は人間の善的な側面に力点を置く新しい歴史観を描いてみせた。両文献の特徴は人類の知能（思考）と歴史、集団形成、コミュニケーションの拡大やその見方（大きくは貿易や戦争、小さくは人間集団の生活や共感性の

問題）についての深い関心である。

本稿ではサピエンスと馬をテーマに新しい文明観を構築することを目的とする。特に生物の誕生におけるウマ科とヒト科の逆転現象から認知革命を経た広義の競馬の誕生までを取り扱う。

例えば、サピエンス（人類）は馬をどのように取り扱って来たか。それは他の諸動物とどのような点で異なるものであったのか。また馬は歴史のある段階で狩猟の対象や家畜、運搬・伝達手段を超越して政治と戦争（領土の拡大）、支配者階級の権力行使と強く結びついた。この人類の友としての人馬の絆は他の諸動物と比べて甚大なものだった。この関係が現代社会ではおおよそ近代競馬の実践に辿り着いている（とりわけ自由・民主主義的な先進国や、その旧植民地国）。

だが、そもそも競馬とは一体何のために行われて来たのであろうか。ハラリ（2016ab）によれば大航海時代以降、人類は無知を受け入れ、異世界へと旅立ち、科学の発展と貨幣経済（資本主義）の進展のもと新しい世界（領土）を開拓し、それはあらゆるモノの流通や交換、異文化の植民地化を可能にさせて帝国主義を展開したという。先ほど私は異端の英国社会と競馬文化について若干述べた。近代以降、人類と馬の関係に英国社会が及ぼした影響は大きい。しかし、それ以前の世界はより動的で慌ただしい世界だった。

以下、本稿ではサピエンスと馬の関係から競馬の誕生、また英国における近代競馬の誕生とサラブレッド種の登場に辿り着くまでの一連の展開を描く。すなわち英国における近代競馬誕生以前の世界史上における人馬の関係性について深く考察していくことにする。

２．先行研究

本研究の目的はサピエンス（人類）と馬をテーマに新しい物の見方を提起することである。従来までの考え方との違いは金谷（2001）による『論語』（第七巻）の三五（子曰、驥不稱其力、稱其德也、＝子の曰わく、驥は其の力を称せず、其の徳を称す。）によく示されている。

> 先生がいわれた、「名馬はその力をほめられるのではなくて、その徳（性質のよさ）をほめられるのだ。」（金谷訳注 2001：292）

この言葉は人類と馬の関係を端的に言い表している。それは人の眼差しの介在である。例えば、野生の馬の群れを見て私たち人類は馬の能力を客観的に認識することはある程度可能であろう。集団の中で明らかに走力が突出している。類まれな容姿や体格を持っている。明らかに逞しく、力強い馬がいるなど。しかし、孔子のいう徳のある馬とは一体何を意味するのか。これは人の「認知」によって判断される。より簡潔に言えば、人に役立つかどうかで「名馬（良馬）」という概念が決まる。実はこの「名馬」という言葉でさえ、サピエンスが作り出した想像上の言語であって、それは用途（性能）によって絶えず変化・更新され続けてきたものなのである。孔子の時代、名馬は乗用や運搬・伝達手段、軍事に優れた馬（主に耐久力）のことを指していた。例え

ば、紀元前11世紀頃の周王朝における馬車を引かせた穆王八駿の伝説（草野1997：283）や『荀子（上・下）』（金谷治訳注1961–1962）の驥＝一日に千里を走る名馬、『三国志（全八巻）』（吉川：1989）に登場する赤兎馬、やっとの思いで50頭ほどの汗血馬を手に入れて、喜びのあまり歌まで作った武帝のエピソード（本村2001：95）など古代中国においても名馬は多く登場した。つまり、人にとって必要な能力を持った馬が盟友だった。軍馬は戦争で役立つ馬。家畜は生産・労働力に役立つ馬。運搬・伝達は走力と持久力を兼ねる馬というように。翻って、我が国の江戸時代のような平和時の「名馬」は専ら観賞用の馬であった[5)]。そして、現代では基本的に「はやい」馬が近代競馬によって「名馬」とされている。本来野生の馬は、ヒト科と同じ動物であったが、認知革命以降は動物社会の盟主、ヒト科の長たるサピエンスの道具となった（この結果、去勢や改良、馬を飼いならす馴致という行為が認知の共有のもと育まれることになる）。

ハラリ（2016ab）のいう認知革命は馬に大きな影響を及ぼした。また、馬はその「多機能性」ゆえに様々な観点から他の諸動物と明確に区別された。現在、私たちが馬に関心を持つ所以である。例えば、マクニールは『世界史』（2008）、『戦争の世界史』（2014ab）の中で馬が人類の歴史に及ぼした影響について大きく触れている。また、我が国でも本村凌二が『馬の世界史』（2001）、『競馬の世界史』（2016）、長島信弘が『競馬の人類学』（1988）を描いている。ハラリ自身も人馬の関係に言及しているが、それはごく僅かなものである。

さて、今から約50年前に梅棹忠夫は『文明の生態史観』（1967）の中で日本と英国を文明の構造上（初期）の一番外側に設置した。ユーラシア大陸（大陸文化）の中央部（騎馬遊牧民族の支配権）から最も東西に遠く離れた両地域（梅棹の言う「第一地域」）は外敵からの脅威にあまりさらされることもなく、また巨大な帝国（場合によっては強大な一神教の国）とその衛星国（「第二地域」）への道に至らず（騎馬遊牧民族の防波堤）、長い間封建的な制度を辿り、比較的平和状態のもと近代化への道を歩んだ。現在における馬券売上の競馬大国は日本、オーストラリア、フランス、米国、香港、英国、韓国、アイルランドである[6)]。これらの諸国はステップ地方（遊牧民）から最も遠く離れた日本、英国、アイルランド等の島国、市民革命が起きたフランス、大航海時代以降に発見された新大陸や英国と日本の旧植民地（併合）国などである（米国、オーストラリア、韓国、香港。香港は一時期日本領）。これは大航海時代以降における植民地帝国主義、そこからの近代スポーツの伝播や自由・民主主義的な価値観の浸透・拡大と繋がっている。我が国は投票制度の発展という意味では近代競馬の受容からの進展著しく、1920年代には先進国と同様に普通選挙法が確立している（1923年に競馬法、1925年に普通選挙法と治安維持法が制定）。それは我が国が①英国中心の近代競馬を受容したこと、②この地に天皇（「ギャンブルを振興するミカド（帝）」）が居たこと（高橋2018）、③民による投票行動（庶民層による馬券購入、私的欲望の発散が早い段階から社会に浸透したこと）が戦前の軍事的なイメージ（非民主主義なイメージ）とは異なり、比較的早期から大衆的な競馬文化（「競馬ファン」）と連動して出現していたことと関係している（杉本2022）。

それゆえ、娯楽の英国社会による近代スポーツの誕生。とりわけ近代競馬誕生の始原となった

広義の競馬誕生のルーツを探ることは大きな意義を持つことであるように思われる。英国型の近代（洋式）競馬とサラブレッドの誕生は、ルールの普遍化と新しい馬と競馬観を伴って世界全体に波及した。王侯貴族やジェントルマンの競馬は植民地帝国主義と結び付き、それはやがて諸外国にも導入された（無論、近代競馬の受容は当地における既存の馬・競馬文化との混淆を経てそれぞれ変化したのだけれども）。我が国の場合は近代以降、「ツール」の競馬文化として特に戦前は軍馬育成の時代を経て、前期的な大衆競馬社会を形成し、戦後は今日のような熱狂的な大衆競馬文化（例えば、「可愛い」という観念が重要であるウマ娘ブーム）に至った（高橋 2022）。この分野では仮想空間・AI の超人ウマ娘が史実の「はやい」名馬を駆逐する現状すら見られる。これはハラリ（2016ab）の未来像である知的設計が生命の基本原理であり、ホモ・サピエンスが超人たちに取って代わられる予測に近いものがある。

このように本稿では馬による新しい文明の生態史観を描くことを主題に置く。次章以降では、具体的にサピエンス（人類）が登場する以前の野生のウマ科とヒト科の時代からサピエンス（人類）の登場、そこからの馬に対する眼差し（認知）の発生。競馬の新しい定義から最終的に英国による近代（洋式）競馬の誕生までの道筋について検討していく。

3．人と馬の営み

現在、我が国において実物の馬と出会うための最適な方法は競馬場に足を運ぶことである。そこでは緑色のターフの上を「サラブレッド」という品種の馬が平均時速 60～70 キロで走っている。もし馬に人間のような職業による分類があったとすれば、こうした馬は「競走馬」と呼ばれるある特定の専門職に従事する生き物たちである。実際に近年のデータを参照すると、日本ではほとんどの馬が競走馬となるために誕生していることが分かる[7]。数値の上では今や日本の馬はサラブレッドという品種の競走馬であると断定してもよいくらいにその数は圧倒的なものとなっている。

周知の通り、歴史的に馬は地球上に存在するあらゆる生物たちの中で最も人に多様な役割を付与されて来た動物であった。ヒト科によるウマ科の雇用である。その終着点がおおよそただ「はやく」走ることを目的とした競走馬であったということは注目すべき事象である。これが物語ることは一体何か。犬、猫、小鳥、金魚などの愛玩動物（ペットや観賞用）ではなく、また主に食用とされる豚、牛、鶏や衣類の素材である羊とも明確に役割が異なる「馬」という存在。本節では人類の友として宿命づけられた馬について簡単に振り返ることにする。

3.1　動物の進化（ヒト科とウマ科）

人類の友として馬が誕生するまでには、動物の進化の過程において幾つかの偶然が必要だった[8]。現在のサラブレッドはウマ科の進化の過程における先行者（馬）とヒト科の進化の過程における後進者（サピエンス＝人類）が逆転して 18 世紀の英国に至り、人為的に創造された個体

である。そもそも「名家の育ちの馬科と名もなく貧しい人類の歴史には大きな差があり、馬の祖先が地球上に大繁栄していた時代には人類の祖先は全く存在していなかった」（山野 1990：16）という。

馬の祖先であるヒラコテリム（エオヒップス）の登場はおよそ 6 千 5 百万年前の暁新世時代にあり[9]、他方、人の祖先が今に近いような生き方を獲得し、野生の猿の群れから独立するようになるのは、およそ 3 千万年前から 2 千 5 百万年前の漸新世のことであった[10]。この 3 千 5 百万年から 4 千万年の間に多くの種族が絶滅し、馬族は生物の名門として耐え凌いだ。それゆえに、「これだけのタイムギャップを超えて馬と人とが人類の時代に共生できたのも奇跡に近いことといわねばならない」（同上：17）のである。

約 6 千 5 百万年前の地球上における大変革によって生物の覇者である恐竜が絶滅し、哺乳類が力を手に入れたことも人と馬にとっては幸運なことであった。馬の祖先は生存していく中で幾度となく絶滅の危機に見舞われながらも体格の変化と大陸の横断によってそこから免れて来た。そして、進化の過程の中で人間にとって都合の良い出来事も度々生じた。例えば、体高、歯の形状（騎乗や馬具の取り付けに影響）、自然環境の変化や肉食動物から逃れるために鍛えられた頭脳と脚力、また長距離移動にも耐えられる身体能力の獲得など（同上：10–30）。まさに「馬の進化は人間にとって神の恩寵であったとさえいいたくなる」（本村 2001：18）ものであった。こうした偶然の副産物なるものが後の人類の覇権時代に入ると、多大な影響を及ぼしていく。「馬は高等動物の中で最も古くから現在に近い状態のまま進化してきた動物であり、人は最近になって大きく変化してきた動物」（山野 1990：25）に過ぎないのである。

3.2　馬への眼差し

ヒト科が初めてウマ科（馬）と接触した時にどのような感情を抱いたのであろうか[11]。また、進化したサピエンスが馬と遭遇した時にどのように認知したのであろうか。まずヒト科は馬を食料の対象とみなし、それを必死になって追いかけた。一方、馬はヒト科から必死で逃げた。ヒト科は様々な工夫をこらして馬を捕獲しようと試みた。肉食動物のように後方から堂々と襲い掛かるのではなく、頭脳（知能）で勝負に挑んだ。罠を仕掛けたり、地形を先読み、崖まで追いつめて馬を谷底に突き落としたり、生物の先輩の胸を借りて懸命に格闘した（同上：30）。こうした戦術はヒト科と馬の個体（体格）に基づく身体能力の差を補うために用いられた。しばらくこのような時代が続いた。やがて 7 万年前に認知革命が起き、1 万 3 千年前にホモ・サピエンスが唯一地球上に生存する人類種となる（ハラリ 2016a：9–10）。

ヒト科と馬の交流の証拠（壁画）が初めて残されたのは、今から約 1 万 5 千年前の旧石器時代のことであった（日本ウマ科学会 2013：48–49）。当初はヒト科にとって馬は、肉や乳を食料とするための狩猟の対象に過ぎなかった。それがやがて紀元前 4 千年から 3 千 5 百年ごろになると、狩猟をやめて、食糧として安定的に利用するために馬を飼いならす家畜が始まる。しかし、馬は他の諸動物と比べて捕獲が厄介な生物であるというだけではなく、その後の馴致も必要であった

（山野 1990：37）。それゆえ、家畜化がやや遅れた[12]。また、食糧としてだけでなく、皮や骨なども衣類や住居の素材として活用された（日本ウマ科学会 2013：48–49）。これは馬がサピエンス（人類）の友として他の諸動物と同じように極めて重要な存在であったことを指し示す事例である。

人の動物に対する眼差しはやがて捕獲対象の時期を終えて、食用や飼育（および簡単な素材）以外の利用価値について考える時期に差し掛かって来る。これがホモ・サピエンス（ラテン語の賢い人）＝動物による「動物」（認知革命後に分裂・発見、サピエンス以外）の仕分けだ。

もともと原始人のイメージでもある毛皮の装飾は人類の祖先が動物の皮を衣類の対象とみなしたことによって誕生した。そして、馬も衣類の一部となった（前述）。そこから次第に、スピードと体力をいかして荷役に使われるようになった。馬は狩りの対象から食用のための家畜、荷物を運ぶ動物、農耕用として飼育されるように変化した（同上：50）。ここまでは他の諸動物にもよく見られた。ただ、その後馬への関心は専ら馬車や戦車、騎乗技術の向上に注がれるようになった。その痕跡は古代の遺跡にも見られた（同上）。

人類は進化の過程において知恵を獲得し、引き伸ばしたが、依然として身体の弱点を残したままであった。この脆弱な身体から人と馬を巡る様々な物語が綴られることになる。

馬は人の身体の弱さを補う動物として最良の存在であったがゆえに守られ、時には酷使されてきた（これを善的に見た場合、馬は人類の友となるのだ）。その延長線の果てが「（近代）競馬」という営みであり、本稿の関心事項となっている。例えば、現在でも人と馬の歴史に対する興味は日々色褪せず、進行過程の只中にある（本村 2001；宮崎 2015；フォーレスト 2017；クラットン＝ブロック 1997；デイヴィス 2005；網野・森 1999 など）。特に馬の「多機能性」や改良による進化の過程、「速度」の観念、コミュニケーション空間の拡がりのための手段、文化・産業・戦争といった歴史展開との連関性において各研究分野から大いなる関心が寄せられている[13]。

また馬以外にも幾つかの動物は改良の歴史を有しており、こうした人の手による変革は生物の細分化であると同時に固体の限定という作用を度々生じさせてきた。実際、サピエンス以外の動物の営みは人為的な介入によって絶滅させられたこともあったし、逆に大量に生産されて、そこから選別するということも頻繁に行われてきた。ハラリ（2016ab）には、そのような歴史も述べられている。競馬もサピエンスの進化した脳による改良と選別の結果によって、現代に残された正の（あるいは負の）遺産の1つである。世界の各地で人馬の接触は、時と場所において若干の差異が見られるものの、現代世界を見渡せば、総じて「近代競馬」や「乗馬」、「馬術」（オリンピック競技）の普及に落ち着くのは馬が人間社会の中に溶け込んで、迅速に走る動物として人類による改良と選別の時代の荒波をくぐり抜けて来た結果である。

それでは、野生の認知された馬はいつ、いかなる場所で走るための動物に変貌したのか。次章では競馬誕生の謎に迫ることにする。

4．競馬とは何か

競馬とは何か。私たちは大自然の中で2頭以上の馬が並走している姿を見て、それが競馬であると言うものはいない。たとえ競っているように見えたとしても他の自然生物や急激な自然環境の変化から逃げているといった場合も考えられる。それを単なる移動という者も居るだろう。そして、何よりそこに人がいない。では、何の目的もなく複数の馬に人が跨って並走している場合はどうか。おそらくこれも競馬であるとは言えないだろう。というのも、競馬はある一定の意識（認知）に基づいて行われる当事者間あるいは集団による極めて高度な人類の営みだからである。

したがって、競馬は馬を用いた何らかのイベントでなければならない。その限りにおいて競馬の誕生には馬に対する人間側の意識改革が必要だった。人の祖先は生きるために食料を追っていた狩猟の時代に「馬」という生物が自分たちよりも「はやい」動物であることに気付いた。そして、それを活用すれば、現在よりも早く情報を伝達し、狩りの効率化を図り、物資を楽に運搬することが可能であると悟った。馬に対する関心は他の似たような特徴を持つ動物（ロバやラクダ）などと同じように実用性に対する確信から芽生え、その後に馬を活用した大規模な娯楽（競馬）や戦争（軍馬育成）が始まったのである。歴史を紐解くと領土の拡張や大規模な戦闘行為に馬が与えた影響は計り知れない。だが、一方で競馬の最初は競走（競争）をしようという誰かの一声であったに違いない。

つまり、競馬は生まれた瞬間から人間の絶え間ない欲望の追求（遊び心や野心）と仲間内での約束や契約（勝負事における）と不可分な関係にあった。中でも、よりはやく、遠くに移動出来ることはステップ地方の遊牧民や定住を覚えたばかりの人間の生活空間をさらに進歩、拡大させた。文明の生態史の始まりである（梅棹 1967）。かくして自らの身体を用いてしか歩くことや走ることしか知らなかった人類は馬に跨り、無限の大地の広がりと競走という「遊び」を強く認識するように至る。そして、その願望の果てに隔離された空間の中で純粋な勝敗だけを競うものとして競馬が生まれたのである。かつて大地の無限の広がりを感じさせた競馬は、ある時点から今日までおおよそ特定の場所（宮中、寺社、競技場、競馬場など）で管理され、定められた規則に基づいて実施される催事となった。しかし、初期には人の威信や宗教が競馬文化には伴い、また遊びや身体競技であるがゆえに細かいルール設定（＝開催能力）が必要であった。そして、これが大規模なものになればなるほど必然的に権力の問題が生じた。その点で本村（2001）の述べる「馬の世界史」とは馬活用による権力化の過程（物語）でもあった。この複雑さゆえに東西の競馬文化は独自路線を進み、それはやがて英国による更なる高度なルールの普遍化 =「近代競馬」の誕生に到達する。その後世界規模に近代スポーツが伝播し、混淆、抵抗のシナリオを描くことになる。さらに競馬には古代からギャンブル（賭博）の問題も孕んだ。古代の競馬は娯楽目的か、スペクタクル（見世物）か、軍事か、と様々なテーマがある。これはどれに比重を置くか、という議題にも重なる。少なくとも近代競馬を生んだ英国では王侯貴族やジェントルマンが娯楽文化として競馬を主導してきた（山本 1997）。そのような歴史の発展段階があった。

現在、私たちが経験している東京優駿（日本ダービー）や春秋の天皇賞、年末の風物詩である有馬記念のような大レースには約10万人規模の観客を集めて何百億円もの金銭が賭けられる「スポーツの祭典」である[14]。一方、古代ギリシアにおけるホメーロスの『イーリアス』に描かれている出来事も競馬とされている（後述）。また我が国で毎年端午の節句に行われる賀茂競馬も競馬の1つであり、さらにモンゴルの大草原で行われる「ナーダム」は“野生の競馬”としてよく知られている（長塚2002）。他にアカデミー賞史上最多受賞作品である映画『ベン・ハー』（1959年）[15]の中に登場するチャリオット（戦車）競走も競馬である。このように地域や場所、時代背景によって競馬の施行形態はまばらである。中には今日では当たり前のように競馬のイメージに付着しているギャンブルを伴わない競馬もある。

では人間が創作したイベントとして競馬を捉えた場合、これらの競馬の違いをどのように見分けるべきであろうか。

4.1　「古式競馬」と「近代競馬」

競馬には「古式競馬」と「近代競馬」の概念がある[16]。「古式競馬」と「近代競馬」の相違はスポーツにおける「身体競技」と「近代スポーツ」の定義に該当するものである（グットマン1997：3）。人間が創作したイベントとして見た場合、両者の機能は全く異なる。従来の一般的な競馬（という言語）の定義は、（サピエンスが認知し、創作したという虚構の共有が抜けて、かつこの場合は人の存在が自明の理とされて）一定の条件に基づいて2頭以上の馬を走らせ、その勝負を競うもの全てをいうが（萩野2004：66）、人が定めた規則にも程度の差はあり、グットマン（1997）の定義によれば古代の競馬は「身体競技」の域を出なかったという。これに対して近代競馬は「近代」のルールの枠組みの中で、社会の近代化以降に生まれた新しい概念である。また、馬の多機能性に対する人の眼差しの発生。すなわちハラリ（2016ab）のいう認知革命以降は、「名馬」という概念も用途によって絶えず変化して来た。古式競馬、近代競馬のいずれもその域を出なかった（はやさか、体力か、妨害する技術か）。ここではまず、近代競馬とは何かについて少しだけ紹介したい。

> 例えば、現在の「近代競馬」の競技方法は、「近代スポーツ」として整備され、次のような特徴を持つに至った。第1に主催者らはレース施行にあたり、公正さが求められ、かつ公平な態度で競技に臨まなければならなくなった。第2に競走馬には年齢、能力などにあわせてランクが付けられ、条件を満たしていれば、どのようなレースに出場させるのか（平地・障害、芝・ダート、距離の長短など）は、原則として出場させる側が選択するようになった。第3にレースを公平に行うため、スタート地点は同一であり、スタート時の枠順は、クジによって決められるようになった。第4に騎手は他の騎手・競走馬への妨害行為がいっさい禁止されており、ゴールの着順については厳しく判断されるようになった。（長塚2002：46）

ここから読み取れる内容は「近代スポーツ」としての競馬には裁量権を持つ絶対的な主催者が存在し、これによって公正確保の徹底と暴力の排除が行われていることが分かる。つまり、現代競馬は萩野が述べるように、「世俗性」、「平等性」、「官僚化」、「専門化」、「合理化」、「数量化」、「記録」と親しい関係にあり、とりわけ競技の可視化である数値化や記録（の更新）は古式競馬時代にはあまり重要視されないものだった。また「近代スポーツ」とは「近代」の果実に他ならず、そもそも社会の近代化がなければ、近代スポーツの誕生は有り得ない。今日、英国が多くのスポーツの母国と考えられているのは、伝統社会における「身体競技」を近代の思想で「近代スポーツ」に昇華したからである。英国発祥といわれるスポーツ文化の多くも、元々は世界の至る所で伝統的な「身体競技」として行われていたという（萩野 2004：66）。

英国が「近代競馬」を生み出した背景には様々な理由が存在するが、動物を利用したギャンブル（動物いじめ）や狩猟の歴史も当然この中に含まれていた（小林 1995）。「競馬が、馬の速さや強さを競い、最終的にいずれが先に目的地に到着するかによって勝敗を決めるものである」（山本 1997：12）ことだけであった時代から「競馬が、個人同士あるいは仲間内の速さ、強さ比べから、不特定の人々を巻き込んだ、広範囲な場所で争われるようなものになる」（同上）には近代的な新しいギャンブルの要素も必要不可欠であった。そのために規則や制度を整える近代的な倶楽部や競馬を実施することが可能な近代的な組織の誕生が始まったのである。我が国では近代が外国人によってもたらされたのと同様に、「近代競馬」も新しいギャンブルを伴ってやって来た。「身体競技」である古式競馬を「近代スポ―ツ」である「近代競馬」に昇華させたものは異国の文化を受容するという意欲とそれに同化しようとする日本人の働きであった。本邦では、近代が持ち込まれると間もなく「近代スポーツ」が誕生し、競馬の存在が日本近代スポーツの誕生と発展に強い影響を及ぼした[17]。また、エリアス＆ダニング（1995）は近代スポーツを「非暴力の競争」と捉えたが[18]、ギャンブルは興奮の探求に最適な素材であり、スポーツの近代化自体もギャンブルの対象となることで高度なルールの制度が形付けられていった。日本の場合、「近代競馬」の誕生が王侯貴族やジェントルマンの英国とは異なる天皇（帝）による日本型近代（洋式）競馬＝大衆競馬を促したという特徴を有しており（高橋 2021）、とりわけ「身体競技」と「近代スポーツ」を明確に区別する上で「馬券（勝馬投票券）」の効果は甚大であった。そして、日本近代競馬の誕生は我が国における他のあらゆるスポーツ分野に近代的なスポーツの仕組み（ルール）とは何か、を最も早くから促したという点で注目に値するのである。

5．ヨーロッパの古式競馬

なぜ英国で「近代競馬」が誕生したのか。そこに至るまでにはどのような過程があったのか。本章で確認したい。しかし、論点は多様である。人類はあそび・ゲーム・スポーツ・ギャンブルを区別した。それらがどのような発展を経て、「近代競馬」に至ったのかという問題がまず一点。また①地形に依存する人と馬の交流史、②社会の近代化、③社会風土によって形づけられる動物

認識あるいは競馬観、④身分階級と宗教、娯楽（に対する考え方）、⑤スポーツ・ギャンブル・ゲームなどの歴史経験やその価値判断、⑥自由・民主主義的なイデオロギー、⑦（議会制度にも関連付けられる）投票行動やレースを管轄する近代的な組織などの問題群があった。この内幾つかのテーマは古式競馬時代にも見られた。競馬は古代から皇帝（国王）権力や見世物（古代オリンピック競技を含む）、庶民（大衆）に提供する娯楽として行われてきた。

とりわけ近代スポーツ分野における王たる英国の支配者たちは「競馬」というイベントを掌握し、あそび・ゲーム・スポーツ・ギャンブルなどといった諸概念と折り合いを付けた（坂上ほか編 2018）。結論から言えば、近代において英国では国王権力と宗教、またゲーム・スポーツ・ギャンブルの問題と自らの身分をある程度切り離すことに成功した（紆余曲折を経ながらも）。競馬は娯楽目的として、国王は宗教上の権威と切り離され（キリスト教系の国教会に所属、国王＝神ではない）、ギャンブルの善悪の彼岸（問題）からも距離を隔てた。この点は我が国の大日本帝国時代の現人神による競馬と異なる（高橋 2021）。英国の王侯貴族、ジェントルマンは庶民に対して決して指導権を失わなかった。彼ら自身がスポーツと宗教、ギャンブルの問題に触れて多くの困難に遭遇した時でさえ、庶民の反発に完全に服従するものではなかった（坂上ほか編 2018）。一方、我が国の場合は為政者たちが庶民の熱狂に振り回された時代があった。杉本（2022）には近代日本における大衆娯楽としての競馬受容の苦悩（英国競馬と反対）の様子が描かれている。以下、競馬の起源について古代ヨーロッパの競馬を見ていくことにしよう[19]。

5.1　競馬の始まりとギリシア競馬

馬は草食動物としてステップ地方の気候変動の影響を強く受けた動物だった。気候の乾燥化、牧草地が減少していく厳しい自然環境の中でも馬は耐えられる（本村 2001：54）。やがて、食用から家畜の時代を経て、馬への関心は専ら移動と騎乗技術の向上に注がれるようになった。しかし、馬の馴致には極めて高度な技術を要したので（同上：21）、文明社会に侵入した馬が家畜を超えて実用に向けて飼いならされるようになるには人類側の成長も欠かせなかった。古代において馬の馴致は文明の尺度を測定するという点において極めて重要な意味を持ち、紀元前から既に存在していた「馬との対話」は、後の産業革命を経た近代社会においても大きな意味を帯びてくる。

例えば、「人馬一体」という言葉がある。この中には高度な馬具による繋がりも含まれる。馬具の発明は人類にとって画期的なものだった[20]。そこには容易な騎乗をもたらす馬の体格、形状の偶然性が伴った（前述）。人が馬に跨り、本格的な騎乗が開始されると、「速度」に対する観念（同上：30）が芽生えるようになった。やがて馬は「人類の足」としてだけでなく、兵器（活馬）や競走馬として戦争と娯楽の時代を突き動かしていくことになる。

アナトリアやシリアから発掘された印章の図柄によれば、紀元前２千年初頭に戦車が実在していたことが推定される（同上：40）。馬と戦車を装備した軍事大国同士の抗争は武人という新しいエートスを身に付けた人間類型を生み出した（同上：44）。それは古今東西何処にでも巻き起

こる普遍的な現象であった。また古代大陸国家では、馬による軍事力の差が国家の盛衰にもたらした影響は大きく、紀元前2千年頃から前1千年付近に騎乗方法が確立するまで戦車の活用は好まれた[21)]。領土の拡大や大帝国の誕生に馬がもたらした影響が大きかったことは主に食用、家畜、運搬・伝達手段を経て兵器と化した馬を用いたコミュニケーション空間の拡がりからも理解することが出来よう。また馬は農耕定住（農耕定住民族）か、遊牧移動（騎馬遊牧民族）か、という人類の生活スタイルの選択にも関与した[22)]。

競馬開催初期の記録はエジプトの壁画（パビルス）にも描かれており、例えば「紀元前16世紀、第18エジプト王朝のトトメスⅠ世が「メソポタミア遠征の戦利品として持ち帰ったアラビヤ産の馬を宮廷の広場で競走させた」」（野村 1985：99）と早くも競馬のようなものが行われたことが確認出来る。また、紀元前12世紀にはトロイアに攻め入ったギリシア軍の名将5人は手柄をあげ、この追悼競技[23)]に二頭立ての戦車競走が実施されたという（本村 2016：5）。さらに紀元前10世紀頃、ヘブライ人が自身の王国を建設し、ダヴィデ王とその子ソロモン王の下で繁栄したが、ソロモン王は馬を好み戦車用の馬と騎兵を大量に編成し、同時に馬の能力を測定するための競走を楽しんだとも伝えられている（本村 2001：45）。このように紀元前10世紀頃には、人馬の繋がりは深まり、文献においてもよりはっきりとした形で競馬開催の記録が登場するようになる。

ギリシアにおける競馬は紀元前8世紀、盲目の詩人ホメーロスによる『イーリアス』第23章に描かれている（本村 2016：4）。本書にはギリシア軍最高の勇者と言われたアキレウスが、戦死した親友パトロクスを供養した場面（追悼式）が描かれている。古代多くの競馬は祝祭性を持ち、儀式・儀礼・宗教としての側面を持ち合わせていた。

その後、古代オリンピックの時代を迎えた。戦車競走は古代オリンピックの花形競技であった（同上：5）。戦車競走がオリンピックの種目に加わったのは、前680年の第25回大会の時のことで、それは四頭立ての戦車競走だった。また、前648年の第33回大会の時に騎乗馬による競走も始まった（だが、ギリシア人は鞍や鐙を知らなかった）。ヘレニズム期の前3世紀半ばには、競技種目は6種目に増え、中でも四頭立ての戦車競走は人気を博した。本競走で最も称賛を浴びたのは馬主であった。当時は「名馬を所有し腕利きの調教師や御者を雇える財力こそが勝敗の決め手として考えられていたという。つまり、戦車競技はエリートたちの威信をかけた競技であり、貴族趣味であった」（同上：6）。また戦車競技は有力者同士の政治的駆け引きの手段となるほど重要なものだったという（萩野 2004：67）。兵士の体力の増進や軍事訓練のための競馬と見世物としての競馬は区別された。とはいえ、このような前776年から、4年に1度の開催で始まったオリンピア競技のルーツも戦争で失った勇者を弔う葬送競技であった（新井編 2019：20）。当時、各ポリスを代表する競技者（戦士）は自由市民（貴族）だった（後に戦争で活躍した市民たちの参加も認められるようになると、名誉や気高さを失った）。彼らは優勝賞金ではなく、名誉を欲した。優勝者に与えられるオリーブの冠は優れた身体と精神の証であった。つまり、古代オリンピック競技の目的は単なる娯楽目的ではなかった。競馬が行われたのは、当初は軍事目的からで

あった。しかも、すでにこの頃には定住による文明の農耕民族と移動を中心とする未開の遊牧民族の構図ははっきりとしていた[24)]。

馬が戦争で用いられるようになってから戦争の規模は大きくなり、それに伴って東西問わず大帝国が次々と誕生していく。とりわけ中央アジアや北西アジアの高原、中近東、北アフリカは馬産地として突出しており、この辺りを拠点とする（スキタイやモンゴルの）騎馬遊牧民たちは騎乗や馬具の技術を発展させて、馬の改良にも長けていた。また、騎馬戦も隣国同士の争いの中で著しく鍛えられた。しかし、彼らは東西の大帝国に対して軍事的な優勢を誇りながら領土の拡大を目指したり、新たな文明を育てることに熱心ではなかった（山野 1990：40–41）。一方で文明国側からみれば、「彼らとて戦車とともに騎馬技術の開発に努力し、すぐれた馬を手に入れるための努力を怠っていたわけではない。そして、そのために生まれたのが競馬であった」（同上：41）。ギリシア競馬の最大の特徴としてはやはり宗教と軍事と娯楽の混淆にあり、中でも近代競馬に至る礎として競馬の政治化や娯楽化が進んだのは注目に値する。

また近代以降における各国の競馬はおおよそ近代スポーツ・軍事・賭博の三位一体で発展することになるが、そのルーツとしてのギリシア競馬は大規模な見世物として、市民を興奮させたことにあり、またルール作りを組織だって展開した最初の国として後の競馬史に与えた影響は大きかった。

5.2　ローマの競馬

文明は自然発生的に生まれることもあれば、周辺の脅威に対する結束から生まれることもある。また、文明は異文化を吸収した未開の地で花開くこともある。ギリシア競馬を持続させたローマ帝国は文明、文化の正統たる後継者として競馬を展開した。

当初、ローマ帝国は地中海周辺に広がっていたので、長距離の移動手段としては馬より船に関心があったという（山野 1990：41）。船は大量の兵士を戦地に送り込むことが出来るが、馬を船で輸送することは困難を極めた。ローマ軍は馬の改良よりも兵士の育成に力を注いだ。しかしながら、その間にも遊牧民族の脅威は増すばかりであり、やがて彼らの地にも高度な文化が育ち、遊牧民族同士の争いが拡大すると、いよいよ自らの手で周辺国家を征服するという意欲が芽生えてくる。こうして長年育まれた騎乗技術の向上と馬匹運用の文化が局地的なものから世界規模へと展開していくことになる。ローマ側にも騎兵を強化する必要が生じ、周辺国に対する戦意高揚の意図からも競馬が行われるようになった（萩野 2004：68）。

だが、ローマの競馬は人気が高まり、軍馬の補充がままならないといった事態まで生じた。民衆は見世物だけでなく、賭け事にも興じ、時には騒動を起こす者も居た。穀物の供給と見世物興行を表す「パンとサーカス」は民衆にとって平和と繁栄の象徴的なものであり、為政者もそのことを理解していた（本村 2001：118–119）。実際、ローマ社会においては征服地からもたらされる膨大な富によって、支配者層や市民の生活は潤い、こうした「経済力の誇示にとって競馬観戦は絶好の機会となった」（ブルーソン 1978：8）。

さらにローマ帝国の競馬は、ギリシア時代の古代オリンピックに参加して名誉を争う「するスポーツ」に対し、勝負の結果を観て楽しむ「観るスポーツ」であった（新井編 2019：22）。ローマにおいて競馬は大勢の人が競馬場に足を運び、競技を観戦して熱狂する大衆競馬に至った。参加者の大半は農民層であり、戦争になると兵士を兼ねた。ローマでの身体的な訓練はより実務的な戦闘訓練に移行した。だが、戦争が長引くにつれて兵士の中心はローマ人から職業軍人へと変わっていった。その結果、戦車競技は本来の目的から離れて、刺激と残忍さを求める、娯楽的な側面が強調されるようになった（同上）。また皇帝自身も新しい競馬に熱狂し、「民衆に熱狂的娯楽を提供して人心を得ようとした」（アルヌー1975：11）という。

その後、戦車競技に参加したのは、主に戦争での捕虜、奴隷、罪人たちであった。また、競馬は競技場における人間同士、あるいは人間と野獣の死闘である剣闘競技や猛獣狩と同様の社会政策（ショー）としての役割を帯び、娯楽的側面から見世物に傾倒し、消費されていった（新井編 2019：22–23）。

そしてこのような状況にありながら「競馬興業は部分的に国庫によってまかなわれていたので、富裕階級には租税が課された。歴代皇帝や高級官僚、上流市民といった面々は、政治的威信を固め、社会的名誉を高めるために、進んで莫大な費用を負担した」（ブルーソン 1978：9）のである。

つまり、この時点での競馬は国家や支配階級による娯楽、見世物の供給という性格を有しており、競馬は政治的配慮によって大衆に与えられた娯楽であって、競技者も多額の報酬を目的として参加したのに過ぎなかった。ローマの競馬はギリシア時代とは異なり、見世物的側面が一層強くなった（萩野 2004：68）。キルクス（競技場）での「戦車競走は己の死を賭したスピード競技」（新井編 2019：23）であり、ローマ皇帝は観戦するローマ市民の熱狂を自らの支持に調達すべく奮闘したのである。

このローマ帝国の拡大は英国にも影響を及ぼした（山本 1997：14–15）。ローマ人のブリテン島占領は紀元前後のことでこの地に長く住み続けていたイケニ族は女王ボアディケアを先頭に勇敢に朽ち果てたという。このイケニ族は馬の繁殖について特別な能力を有していたとされ、遺跡から馬の肖像が描かれた金、銀の古銭が出土している。また英国で最も古い競馬のレースは 210 年、ヨークシャーのウェザビーで行われている。このときローマ皇帝セプティミウス・セウェルス（在位 193–211）は、この国に持ち込んだアラブ馬の軍馬によって競馬を行ったとされる。したがって、現在世界中に広がっている英国競馬のルーツは、ローマ人によっても持ち込まれたのである。

5.3　古式競馬の終わり

かつて絶大な力を誇ったローマ帝国も、相次ぐ属州の反乱と蛮族の進入による内部分裂の結果、東ローマ帝国を残して滅亡する[25)]。ローマ軍は平和を享受していたが、外敵に対する準備を怠り、軍事力において圧倒的な優勢を誇るゲルマン諸族に対抗する術はなかった。410 年にローマを略

奪した西ゴート族の王は征服後、ローマの地に競馬を復活させようと試みた。しかし蛮族による競馬の復興は簡単なものではなかった。蛮族にとっての馬は、戦闘力としての存在であって、競馬を施行するための意欲を持つことは難しかった。また何より娯楽としての競馬を理解する為には、一定程度の文化水準が必要であり、馬を活用する催事として競馬運営を取り仕切る能力も必要だった。それゆえ、ローマで繁栄していた馬匹育成も競馬の衰退と共に消滅してしまった。

一方、東ローマ帝国はローマ帝国の文化を受け継ぐものとして競馬を行った。4 世紀になると、戦車競走の中心はコンスタンティノープルに移され、数万（推定 5 万や 10 万人）ほどの大人員を収容する大規模な競技場が建設されて人気を博した。とはいえ、旧ローマ帝国時代には、30 万（推測によれば 50 万人）規模の競技場もあった（本村 2001：115）。ここでは「莫大な賭け金が飛び交い、群衆の熱狂や対抗意識はときには政治的対立をはらんだ騒動や暴動までいたった」（本村 2016：11）という。

また東ローマ帝国における最も重要な儀式である皇帝即位式までもが競技場で行われた（渡辺 1985：81）。このように旧ローマ帝国時代と同じように、見世物的側面と政治文化（政治集会、暴動）がその場に混在していた。だが、東ローマ帝国の競馬は民衆の熱狂により、ついに大規模な騒動を起こすに至る。東ローマ帝国の競馬は娯楽化が極致に達し、熱狂、増悪、膨大な賭金（賭博）による得失から端を発する喧噪、暴動等の弊害が出た。コスティニアヌス帝治世中に 3 万人以上の死者を出す暴動（「ニカの乱」、532 年）が発生したことで競馬観戦は次第に禁じられるようになった。

その結果、7 世紀頃には競馬は徐々に衰退に向かい、馬の活用は農業などの労役、物資の輸送、局地的な戦闘等といった古来の用途に限れてしまう。競馬が再び歴史の表舞台に登場するには、英国社会の「近代化」と上流階級による積極的な競馬振興の時代においてである。

6．おわりに

本稿では英国本土における近代競馬誕生以前の競馬を描いた。この後動物いじめ、狩猟の歴史と伝統的な競馬が結び付き、娯楽目的の競馬が倶楽部（共通の仲間）を介して発展していく（坂上ほか編 2018）。もともと山野（1990）が述べるように英国は馬改良の後進国であったが、王侯貴族やジェントルマンの庇護の下、馬産改良の遊び心（育成上のギャンブル）から生まれたサラブレッドの誕生（18 世紀に出現し、19 世紀の初頭になって世界に台頭。血統書・記録・ルールの制度化により競馬後進国から瞬く間に世界最強の競馬大国となる）によって今日的な名馬の原初たる「はやさ」（距離別の細分化も）を生み出すことになる。やがて近代競馬は賭博文化とジェントルマン精神を兼ねて世界へ波及する。

例えば、英国から見て最果ての地である我が国はブリテン島からアメリカ大陸へ、次にアメリカ大陸から日本へという連続性（黒船の来航）によって東西文明を接続した[26]。後の競馬（馬券）大国はユーラシア中央部の果てに生まれる。ただし、そこには課題が山積みであった。それ

は冒頭で述べた問題群である。とりわけ1845年に英国で成立した「賭博法」では競馬は「技を競うゲーム」として規制から除外された。トランプやさいころなどの「偶然に頼るゲーム」とは区別され、前年法案の提出者リッチモンド公爵は賭博の弊害から守るべき「男らしいスポーツ」の例として競馬を挙げた（坂上ほか編 2018：51–52）。これは我が国に近代競馬が伝わる以前の出来事である。こうして馬はサピエンス（人類）の眼差しによって特別な地位を獲得したのである。

註

1）我が国においては、「縄文時代、弥生時代の日本列島に馬はいなかった。馬の飼育という新しい文化が朝鮮半島から持ち込まれ、拡がってゆくのは五世紀前後の時期、古墳時代中期の出来事」（蓮池 2020：9）である。一方で競馬が始まったのは飛鳥時代の文武天皇の時代である。『続日本紀』に701年（大宝元）端午の日に、文武天皇が走馬を行ったという記録がある。これより古く、『大日本史』の『日本紀』に天智天皇が665年（天智4）端午の節会に走馬をご覧になったという記載もある。こうした競べ馬はもともと中国の武技のひとつとして伝えられた。日本にもたらされてからは、五穀豊穣・天下泰平を占う儀式になったという（早坂 1989：64）。また、端午の節句に馬を走らせる唐の行事「籍柳」の模倣で始まったともある（萩野 2004：69）。一般的に701年が最初とされている（馬の博物館編 2012）。

2）本邦における近代競馬の受容は1860年（万延元）9月であるが、正式に競馬番組（レーシングプログラム）が残っており細かい規則や競走の記録が分かる競馬開催は1862年（文久2）5月に横浜新田（現在の横浜中華街付近）で行われたものである（秋永 2012）。なお、杉本によれば、開催が確実視されるのは同年10月であるという（杉本 2022：11–13）。

3）サラブレッドは馬の品種の1つでthorough（完璧に、徹底的に）+ bred（交配されたもの）であり、「純血」、「良血」、「完全に育て上げられた」、「エリート」（名家や名門の出身といった人に使用される比喩としても）といった意味を持つ。競走馬としての定義は「連続8代にわたりサラブレッドに交配された馬」と決められている。馬、競馬の歴史については本村（2001, 2016）、英国の競馬とサラブレッドについては山本（1997, 2005, 2013）、またサラブレッドについては野村（1985）、山野（1990）、ウィレット（1978）に詳しい。サラブレッドは馬の品種の1つである（日本ウマ科学会 2013）。https://www.jra.go.jp/kouza/yougo/w510.html（競馬用語辞典：サラブレッドも参照）

4）ハラリ（2016ab）はホモ・サピエンスによって7万年前に生じた出来事を「認知革命」と呼ぶ。この時、虚構の言語が出現し、歴史現象が始まったという。虚構の共有とは、三項関係の理解の共有を指し、具体的には「私」と「あなた」と「世界」の関係の理解を互いに共有することをいう。そして、その理解共有をもとに言語で事象をラベリングする。また、その先に実在しないものを「表象」として言語化し、それらを共有することによって、「概念」、「目的」、「価値」なども共有する。こうして「文化」が出来る。『サピエンス全史』の認知革命「虚構を共有する」とは何か（長谷川眞理子、2019年4月3日付）https://10mtv.jp/pc/content/detail.php?movie_id=2813
私はこのとき動物としてのヒト科は自然状態から分裂し、人類と「その他の動物」になったと考える。

5）江戸時代において第五代将軍である徳川綱吉の時代に有名な「生類憐みの令」が行われた。その中で1685年（貞享2）9月に「拵馬禁令」が出された。拵馬とは人間の都合で馬の筋を切るなど見た目を良くする行為である。現在の人間の整形にあたり、西洋のような品種改良とはまた異なる文化であった。この禁令では馬を「拵える」、「繕う」行為は「不仁」とされた。一方で、他の将軍の時代では将

軍や武士のステータスとして拵馬が良馬として好まれた（兼平 2015）。

6）国際競馬統括機関連盟（IFHA）の調査。2019 年度の賭け金額ランキングの上位は自由民主主義的な国が多い。https://www.ifhaonline.org/default.asp?section=Resources&area=4&FF=15&statsyear=2019&report=D

7）令和 4 年 6 月「馬めぐる情勢」（農林水産省畜産局畜産振興課）によれば、我が国における「馬の総飼養頭数」の中に占める馬種の割合（令和 2 年）でみると軽種馬（競走用馬）= サラブレッドの数は 45,433 頭（総飼養頭数 77,762 頭）で約 6 割を占める。現在では、サラブレッド種が他種を大きく突き放している。https://www.maff.go.jp/j/chikusan/kikaku/tikusan_sogo/attach/pdf/sonota-4.pdf
また、馬は 19 世紀末にアメリカで開発されたトラクター（農業用の機械）に変貌してしまった（藤原 2017）。

8）本項目は山野（1990）を中心に日本ウマ科学会（2013）を参考にしている。人馬の祖先の誕生については最新の研究を踏まえる。山野はエオヒップスの誕生を 5 千万年前（始新世）、ヒトがサルの群れから独立したのを 2 千万年前（中新世初期）とし、その差を 3 千万年としている（山野 1990：16）。

9）ヒラコテリム（エオヒップス）の体高はわすが 30 cm とキツネくらいの大きさしかなく、北米大陸やヨーロッパで生活していた。現在のような形の馬が登場するのは、今から 300 万年前のことである（日本ウマ科学会 2013：32）

10）「サルとヒトの進化の分岐、定説より最近か ミシガン大学」（2010 年 7 月 16 日付）、英科学誌ネイチャーによる発表。最新の研究では定説より数百万年ほど新しい 2 千 8 百万年前から 2 千 4 百万年前と推定されている。https://www.afpbb.com/articles/-/2741112?pid=5970393

11）本項目は主にハラリ（2016ab）、日本ウマ科学会（2013）、山野（1990）、アンソニー（2018ab）、本村（2001）を参照。

12）馬の家畜化の時期については諸説ある。人類が馬と接触し、やがて狩猟の対象から家畜化に至ったのは後期新石器時代の紀元前 4000 年頃だと言われている。ウクライナ地方ドニエプル川西岸のデレイフカ村で発見された 52 頭の馬骨から馬の家畜化の成功と騎乗用の馬が存在していたことが十分に考えられるという（本村 2001：23–26）。また、ハラリにおいても馬は紀元前 4000 年頃に家畜化されたと述べられている（ハラリ 2016a：105）。一方、学会では紀元前 3500 年頃とある（日本ウマ科学会 2013：48）。また、すでに動物の家畜化は羊、ヤギ、豚、牛などでも行われていたが、馬の家畜化はポントス・カスピ海ステップ地方でそれより後の前 4800 年以降に出現したとされる（アンソニー 2018a：290）。ハラリは「すべての農耕社会が家畜に対してそこまで残酷だったわけではない。家畜化された動物の一部は、かなり恵まれた生涯を送った。羊毛を取るために育てられているヒツジ、ペットの犬や猫、軍馬や競走馬は、快適な境遇を享受することが多かった。ローマ皇帝カリグラは、愛馬インキタトゥスを執政官に任命することを考えていたとされている」（ハラリ 2016a：126）。

13）とりわけマクルーハンの唱えたメディアは身体を拡張するという概念、人間拡張の原理においてはテクノロジーである自動車に至る前の馬は原始的な足の拡張にあたる（マクルーハン 1967，1987）そもそも「殷代の甲骨文字には「車」の文字が出ているが、その文字そのものが戦車の基本形態を平面に写しとったものとみなされている」（本村 2001：48）。

14）我が国では「競馬はスポーツとゲームとギャンブルが渾然一体となった心の高まり」（長島 1998：i）とされる。

15）映画『ベン・ハー』は 11 部門受賞。この記録は『タイタニック』（1997 年）、『ロード・オブ・ザ・リング／王の帰還』（2003 年）と並ぶ。https://www.oscars.org/（映画芸術科学アカデミー公式ホームページより）

16）現在行われている競馬「近代（洋式）競馬」は近代になってヨーロッパの形式をもとにして作られ

たものであり、これと区別して広義の競馬は「古式競馬」と呼ばれている（日本中央競馬会編 1976：59）。この違いについての先行研究には萩野（2004：66–74）がある。

17）横浜開港後、我が国最初のスポーツとして近代競馬はもたらされた（馬の博物館編 2016：5）。

18）多木によれば、「近代スポーツのひとつの特徴は、身体の闘争であるにもかかわらず、そこから暴力的な要素除き、身体の振る舞いにたいしてある規則を課したことにある。闘争ではあるが、相手を傷つけてはならないし、ましてや死に到らしめてはならないのである」（多木 1995：16）。しかし、エリアスのいうスポーツの文明化の過程（非暴力化した競争、非暴力的なゲームとしてスポーツが成立する過程、英国社会の近代化との関連）にも弱点はあり、権力（国家）による暴力の独占や外部（国外）との政治的関係においては非暴力であるどころか、戦争という暴力に発展することもしばしばあったという（同上：173）。なお、我が国の公営賭博は政府による暴力の独占によって成り立っている。

19）本章はハラリ（2016ab）、日本ウマ科学会（2013）、山野（1990）、アンソニー（2018ab）、本村（2001,2016）、萩野（2004）、マクニール（2008, 2014ab）、新井編（2019）、梅棹（1967）等を参照。

20）馬具についてハミ（銜）、頭絡、手綱、蹄鉄、鞍、鐙などがある（日本ウマ科学会編 2013）。こうした道具の開発・改良と、それを扱う技量（特に騎馬遊牧民）が人類社会の攻防に与えた影響は大きい（マクニール 2014ab）。

21）戦車の活用と騎乗法の定着について本村は紀元前 1 千年程度の解釈である（本村 2001：52–55）。マクニールは戦車の活用は紀元前 1800 年から前 1500 年をピークに、早くも紀元前 1400 年には騎乗があったと述べている（マクニール 2014a：38–47）。

22）農耕定住民族を文明国側、騎馬遊牧民族を未開国（野蛮国）側と考える切り口は多い。梅棹（1997）、山野（1990）、本村（2001）、マクニール（2014a）のベースもこれに近い。しかし、本村は騎馬遊牧民の文字資料が残されていないことに度々言及している（本村 2001：56 ほか）。この点で公平性に欠ける。東西の帝国が記した資料に依拠せざるを得ない。梅棹の騎馬遊牧民をみる視点は衝動的である。「乾燥地帯は悪魔の素だ。乾燥地帯のまん中からあらわれてくる人間の集団は、どうしてあれほどはげしい破壊力をしめすことができるのだろうか。［中略］とにかく、昔から、何べんでも、ものすごく無茶苦茶な連中が、この乾燥した地帯の中からでてきて、文明の世界を嵐のようにふきぬけていった」（梅棹 1967：95）。一方、技術と軍隊と社会で考えるマクニールは文明と野蛮の攻防を技術と軍隊の相互作用として捉えている。馬も含まれる。山野や本村は馬の活用法（生産、改良、戦略、競馬）による攻防を描いているので、馬の活用に優る騎馬遊牧民側と定住側、馬の相互作用論といった印象を抱く。

23）古代の葬送競技の名残として、近代戦争においても戦場では招魂祭が行われた。一連の儀式が終了すると、最後に相撲や競馬も行われた（小松 2009：92）。

24）農耕定住民が騎馬遊牧民を敵と捉えるレベルは 2 通りあったと思われる。1 つは紀元前から紀元 3 世紀までの周辺に居る危機、脅威としてのそれで、例えばキンメリア人、スキタイ人の騎馬民族、アッシリア帝国やペルシア帝国、その他中東を巡る攻防などである（マクニール 2014：44–66，本村 2001：52–76）。これには匈奴を中心とする騎馬民族と古代中国の帝国による相互作用も含まれる（本村 2001：76–97）。もう 1 つは紀元後に脅威が実態化してしまったそれである。これは、ユーラシアの西側世界においてはゲルマン民族の大移動とフン族の脅威に代表される野蛮人とみなされた騎馬遊牧民の文明社会における進入である。またユーラシアの東側における五胡十六国や突厥の大遊牧帝国が代表的なものである（同上：130–150）。東西いずれも紀元 4 世紀に起こっていることに注目されたい。また、ハラリ（2016ab）はサピエンス（人類）の歴史において狩猟採集社会から農耕定住社会への移行を悲劇と捉える。ホモ・サピエンスは農業革命によって一握りの植物種に家畜化されたと述

べている（ハラリ 2016a：107）。

25）本項目は萩野（2004：68）を参照。東ローマ帝国の競馬については本村（2001：168–169）、Cameron（1976）に詳しい。ローマ帝国時代における競馬場の規模とルールに関する解説は Humphrey（1986）がある。

26）もともと大航海時代に至る前までは、しばらくの間アメリカ大陸にも馬が居なかった（本村 2001：126–128, 226–230）。また 1492 年には、アメリカ大陸に馬は存在しなかったとある（ハラリ 2016a：211）。それにもかかわらず、馬・競馬文化の後進国であった日米が第二次世界大戦で最終決戦を演じたのは驚くべき事象であった。

参考文献

秋永和彦（2012）『近代競馬 150 周年記念特別展示 日本近代競馬史展』馬事文化財団。

網野善彦・森浩一（1999）『馬・船・常民 ── 東西交流の日本列島史』講談社学術文庫。

新井博編（2019）『スポーツの歴史と文化［新版］』道和書院。

アルヌー、P.（1975）『競馬』野村圭介訳、白水社。

アンソニー、D.W.（2018a）『馬・車輪・言語 ── 文明はどこで誕生したのか（上）』、東郷えりか訳、筑摩書房。

────（2018b）『馬・車輪・言語 ── 文明はどこで誕生したのか（下）』、東郷えりか訳、筑摩書房

ウィレット、P.（1978）『サラブレッド』日本中央競馬会訳、日本中央競馬会。

馬の博物館編（2012）『特別展 近代競馬 150 周年記念 くらべ馬展』馬事文化財団。

────（2016）『根岸競馬場開設 150 周年記念 ハイカラケイバを初めて候』馬事文化財団。

梅棹忠夫（1967）『文明の生態史観』中央公論社。

エリアス、N. & ダニング、E.（1995）『スポーツと文明化 ── 興奮の探求』大平章訳、法政大学出版局。

金谷治訳注（1961–1962）『荀子（上・下）』岩波書店。

────（2001）『論語（ワイド版）』岩波書店。

兼平賢治（2015）『馬と人の江戸時代』吉川弘文館。

草野巧（1997）『幻想動物事典』新紀元社。

グットマン、A.（1997）『スポーツと帝国 ── 近代スポーツと文化帝国主義』谷川稔他訳、昭和堂。

クラットン＝ブロック、J.（1996）『図説 馬と人の文化史』桜井清彦監訳・清水雄次郎訳、東洋書林。

小林章夫（1995）『賭けとイギリス人』ちくま新書。

小松裕（2009）『「いのち」と帝国日本（全集 日本の歴史・第 14 巻）』小学館。

坂上康博・中房敏朗・石井昌幸・高嶋航編『スポーツの世界史』一色出版。

杉本竜（2022）『近代日本の競馬 ── 大衆娯楽への道』創元社。

高橋一友（2018）「明治天皇と競馬 ── 近代日本における馬概念の変容」『社会システム研究』京都大学大学院人間・環境学研究科社会システム研究刊行会、第 21 号、141–152。

────（2021）「大日本帝国下における競馬 ── 前田長吉を事例に」『社会システム研究』京都大学大学院人間・環境学研究科社会システム研究刊行会、第 24 号、1–17。

────（2022）「令和時代における天皇賞の再生 ── TV アニメ『ウマ娘 プリティーダービー』を事例に」『社会システム研究』京都大学大学院人間・環境学研究科社会システム研究刊行会、第 25 号 19–37。

多木浩二（1995）『スポーツを考える ── 身体・資本・ナショナリズム』ちくま新書。

デイヴィス、C.［編］（2005）『図説 馬と人の歴史全書』別宮貞徳監訳、東洋書林。

長島信弘（1988）『競馬の人類学』岩波新書。

長塚孝（2002）『日本の古式競馬 ── 1300 年の歴史を辿る』神奈川新聞社。
日本ウマ科学会（2013）『ウマ大図鑑 ── びっくり能力と種類、歴史がよくわかる！』PHP 研究所。
日本中央競馬会編（1976）『競馬百科』みんと社。
野村晋一（1985）『サラブレッド』新潮社。
萩野寛雄（2004）『「日本型収益事業」の形成過程 ── 日本競馬事業史を通じて』早稲田大学大学院政治学研究科博士論文。
蓮池明宏（2020）『「馬」が動かした日本史』文春新書。
ハラリ、Y.N.（2016a）『サピエンス全史 ── 文明の構造と人類の幸福（上）』柴田裕之訳、河出書房新社。
────（2016b）『サピエンス全史 ── 文明の構造と人類の幸福（下）』柴田裕之訳、河出書房新社。
早坂昇治（1989）『文明開化うま物語 ── 根岸競馬と居留外国人』有鱗堂。
フォーレスト、S.（2017）『人と馬の 5000 年史 ── 文化・産業・戦争』松尾恭子訳、原書房。
藤原辰史（2017）『トラクターの世界史 ── 人類の歴史を変えた「鉄の馬」たち』中公新書。
ブルーソン、E.S.（1978）『世界の競馬と生産 ── サラブレッドの誕生および各国における発展と現況』日本中央競馬会訳、日本中央競馬会。
ブレグマン、R.（2021）『Humankind 希望の歴史 ── 人類が善き未来をつくるための 18 章（上・下）』野中香方子訳、文藝春秋。
マクニール、W.H.（2008）『世界史（上・下）』増田義郎・佐々木昭夫訳、中公文庫。
────（2014a）『戦争の世界史 ── 技術と軍隊と社会（上）』高橋均訳、中公文庫。
────（2014b）『戦争の世界史 ── 技術と軍隊と社会（下）』高橋均訳、中公文庫。
マクルーハン、H.M.（1967）『人間拡張の原理 ── メディアの理解』後藤和彦・高儀進訳、竹内書店。
────（1987）『メディア論 ── 人間の拡張の諸相』栗原裕・河本仲聖訳、みすず書房。
宮崎正勝（2015）『「空間」から読む解く世界史 ── 馬・航海・資本・電子』新潮選書。
本村凌二（2001）『馬の世界史』講談社現代新書。
────（2016）『競馬の世界史 ── サラブレッド誕生から 21 世紀の凱旋門賞まで』中公新書。
山野浩一（1990）『サラブレッドの誕生』朝日新聞社。
山本雅男（1997）『ダービー卿のイギリス ── 競馬の国のジェントルマン精神』PHP 新書。
────（2005）『競馬の文化誌 ── イギリス近代競馬のなりたち』松柏社。
────（2013）『イギリス文化と近代競馬』彩流社。
渡辺金一（1985）『コンスタンティノープル千年 ── 革命劇場』岩波新書。
吉川英治（1989）『三国志（全 8 巻）』講談社。
Cameron, A., 1976, *Circus Factions: Blues and Greens at Rome and Byzantium*, Oxford University Press.
Humphrey, J.H., 1986, *Roman Circuses: Arenas for Chariot Racing*, Berkeley: University of California Press.

参考ウェブサイト

日本中央競馬会（JRA）ホームページ https://www.jra.go.jp/
農林水産省ホームページ https://www.maff.go.jp/
国際競馬統括機関連盟（IFHA）ホームページ　https://www.ifhaonline.org/
テンミニッツ TV ホームページ https://10mtv.jp/
国際ニュース（AFPBB News）ホームページ　https://www.afpbb.com/
映画芸術科学アカデミー公式ホームページ　https://www.oscars.org/
（以上、最終閲覧日：2023. 02. 16）